

ちーむ麻の葉

復興支援団体

それでも海が好きだから... 私たちは津波であまりにも多くのものを失いました。けれど、私たちは海を恨んではいけません。海とともに自然豊かなこの地で生きていこうと思っています。

震災直後から募金や物資提供などさまざまな形で被災地支援が行われてきました。これからも継続的な支援が必要とされている中「何か自分にも協力できることはないかな」と感じられている方も多いのでは。

「奇跡の一本松」で知られる若手県陸前高田市には、手仕事を通じて復興支援を行っている、被災者による被災者支援団体「ちーむ麻の葉」があります。その活動に賛同し、香南市内でも婦人会を始めJA女性部などさまざまな団体や個人による支援の輪が広がっています。「ちーむ麻の葉」の活動を紹介します。

手を動かしてあげれば 気がまぎれる

活動のきっかけは、支援物資を持って仮設住宅(以下、仮設)を回っていた時に、あるおばあちゃんの仮設で台所にぶら下がっていたドレスタオルを目にしました。それは、おばあちゃんが支援物資でもらったタオルを使って手作りしたもので、おばあちゃんの「手を動かしている時は気がまぎれるから」

海とともに生きる

その後、このプロジェクトを進めるにあたり、仮設で生活する方々に必要なことは「自分たちにもやる必要がある。役に立つという誇りだ」と気づきました。そこで『それでも海が好きだから...半歩前進プロジェクト』と命名。お涙ちようだいではなく、海に多くを奪われても、海を愛し、海とともに生きるという被災地の真の想いを知っていただくことを主旨としています。

一枚のタオルから生まれる「ときめき」

活動内容としては、ドレスタオルやアクリルたわしの材料を無償で提供し、でき上がった作品を買い取り、それを支援していただく。これもひとえに、全国各地の方々から寄せられた数多くのご支援の賜物だと思えます。被災地に心をお寄せくださっていることに心から感謝いたします。

これからも笑顔あふれる活動を続けていく

「まだ、縫っていいですか」「もっと編んでいいですか」そんな言葉に「もちろんです。注文があるんですよ!」そう答えられる日々が続きますように...これからも微力ながら「ふれあいの活動を続けてまいります。」
「みんなが笑顔になって、人と人がつながっていける。そして、この三陸で海と一緒についていって生きていきたい!」そう思いながら...



ドレスタオルのおかげで毎日楽しく暮らしています。本当にありがとうございます。



▲ちーむ麻の葉のスタッフ
左から、近江ひろみさん、大和田加代子さん(代表)、鈴木こうさん、玄修さん

る方々に買っていただくというものです。
ドレスタオルにこだわるのは、訳があります。それは「ときめき」。一枚のタオルが、ワンピースに形を変えていく過程で、母ちゃんたちは何度も目を細めながら「めいこいな(かわいいな)」「とつぷやく光景を目にし、この「ときめき」こそが、被災者に必要なのだと感じました。

授産施設も協力

また、ドレスタオルをかけるハンガーは、地元「気仙杉」の端材を使い、知的障害者授産施設の「あすなるホーム」に仕上げ加工をお願いしています。あすなるホームは、震災の直接的な被害は少なかったのですが、取引先の多くを失い、仕事の受注が減っていたこともあり、ともに復興を目指すものとしてタッグを結成。ちーむ麻の葉だけでなく、授産施設を巻き込んでプロジェクトになっています。

被災者に元氣と誇りを与える

ドレスタオルを回収に伺った

取り扱い店

野市町にある「お菓子と雑貨 おひさん」では、ドレスタオルとアクリルたわしセットの販売、およびドレスタオルを作るための材料を集めて、ちーむ麻の葉に送る窓口をしています。皆さんの温かいご支援をお願いいたします。

ドレスタオルとアクリルたわしのセット 1,100円
全額が支援金として被災地へ届きます。



①海を汚さないために、洗剤不要のアクリルたわし。
②ペーパータオルではなく、繰り返し使えるドレスタオル。

材料を集めています

- ★タオル(厚地のもの)
- ★ボタン(あまり大きくないもの)
- ★バイヤステープ(幅12.7mmのもの、無地、柄)
- ★綿レース(白、色もの、あまり幅の広くないもの)
- ★アクリル100%毛糸
- ★縫い糸(ミシン糸、手縫い糸)

■問い合わせ
おひさん ☎56-1053



女川通信 ④

昨年4月より宮城県女川町に派遣されている市職員川崎大也 主査の復興奮闘記をお伝えします。 ※不定期掲載

被災した土地の買い取り

これまで用地係では、町中心部の先行地区である高台移転先の用地買収を行ってきました。これも被災者が生活を再建するうえで重要なことです。

一方、被災した土地の買い取りも同等に、いえ、それ以上に重要なことです。というのも、平地が少ない女川町では、被災者の移転先を全て高台(山林)にすることはできず、被災した土地の一部を今回の津波レベル以上に高上げ(盛土)し、居住地を造成しなければなりません。ですので、被災した土地の買い取りは、復興の事業用地を確保することにあり、またその土地代金が被災者の生活再建に必要な直接的資金となることから、一時も遅らすことができないのです。



▲雪化粧した被災地(町中心部高台から)

契約に際しての被災者の苦悩

買取対象となる土地には、登記名義人が亡くなっていたり、抵当権が設定されている土地が数多くあります。緊防空は任意事業であるため、所有権移転の前提登記となる相続登記や担保権抹消登記は、契約前までに権利者自らが行わなければならないが、中には多額の債務を抱えており抵当権が抹消できない、司法書士が手一杯で登記ができないといった方もおられ、買取期限が迫る中、多数の権利者がその対処に大変な苦労をされました。窓口に相談にいられた被災者の切実な苦悩を目の当たりにし、言葉を失います。

買い取り対象は1,500筆900人

そのような状況において、昨年11月下旬から緊防空での町中心部の被災した土地の買い取りが始まりました。買い取りの対象となる土地は、1,500筆900人、うち売却希望が800筆700人と膨大な数です。そのため、行政区単位で日程を決め、現在は3階建て仮設住宅が建つ町民野球場の事務室に個別ブースを設置し、契約会を行いました。

契約会には、被災した土地の売却を希望する方々が次々と訪れ、町職員とコンサルタントが対応しますが、何の問題もなく手続きが完了する方がいる一方で、今まで住み慣れた土地を手放す思いと葛藤する方など、その様子は人それぞれです。結果、約1カ月で700筆500人(28社、33億円)の買い取りを行いました。

今後も続く土地の買い取り

しかし、女川町全体からすると、緊防空での土地の買い取りは半分にもなりません。今月下旬からは、町中心部における防災集団移転促進事業(以下、防集)による被災した土地の買い取りが数カ月かけて始まります。

また、離半島に点在する13の各地区も待たなしの状況です。こちらにも防集による被災した土地の買い取りと高台移転先の用地買収を行います。

早期の復興・被災者の生活再建を図るべく、土地の買い取りはまだまだ続きます。派遣期間も残すところ1カ月となりましたが、女川町が復興へ進むよう、精一杯頑張ります。

